

ショートレポート

主体的な学びの実現を目指す学生 IR と学修成果の可視化

市村 光之

(横浜国立大学大学院教育強化推進センター)

Short Reports

Student-Based Institutional Research (IR) and Visualization of Learning Outcomes to Fostering Independent Learning

Mitsuyuki Ichimura

(Graduate School Education Center, Yokohama National University)

横浜国立大学では、学生の主体的な学びを醸成するツールとして e ポートフォリオシステムを再構築することで、学修成果を可視化し、かつ学生に関する IR 情報を集積する仕組みを実現した。これにより、教職員が教育課題について議論する材料を共有できるようになった。学生に主体的な学びを促すには、専攻する学業と進路との関連を意識させること等がカギであることが確認できた。一連の可視化や IR を実質化するには、ポートフォリオの活用法等の理解を促進し学生を動機付けすることで、入力情報の信頼性向上を図ることが今後の課題であることがわかった。

キーワード：IR、学修成果、学習ポートフォリオ、大学教育再生加速プログラム

Keywords: Institutional Research, Learning Outcomes, Learning Portfolio, AP

1. 本稿の目的

大学教育の質保証の施策として、学修成果の可視化や、大学として各種意思決定の基礎資料提供のための IR (Institutional Research) が各大学で進められている。しかしそれらはツールであって手段に過ぎない。本来、大学教育の学修成果は各専門分野の知見であり成績である (江原, 2018)。何のための可視化か、IR により何を明らかにしたいのか、合目的な設計と運用が求められる。

横浜国立大学では、2014 年に文部科学省の大学教育再生加速プログラムに採択され、《学生の主体的な学びのデザイン》を促す学修成果の可視化に取り組むと共に、学生の現状と教育課題を探る手段として独自の IR 体制構築に努めている。学修成果の可視化および IR 情報の集積ツールとして e ポートフォリオシステムを全面改修し、半期ごとに全学生が入力する仕組みを整備した。これにより学生は、学修成果を学士力と就業力の両面で可視化できる。教職員側は、学生情報を全数調査で把握し、成績等の教学 IR データと共に分析することで教育改善に活用できる。本

稿ではその仕組みとこれまでの成果を概観し、今後の課題について考察する。

2. 横浜国立大学が推進する学生 IR

2.1. 学生 IR の全体像

本学では、高大接続から在学中、さらに卒業後の大社接続を含め質保証の伴った大学教育を実現するための仕組み作りを進めている。それらの全体像を図 1 に示す。

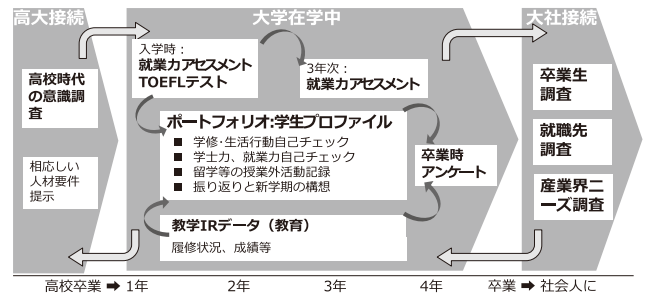


図 1 教学 IR (教育)・学生 IR システム

大学が取り組むIRのうち、学生教育と学問研究に関する教学IRが対象とする範囲は大学により様々である。教育に関するIRは、狭い意味では履修状況、成績、ディプロマ・ポリシーの学修成果など、学業にフォーカスした項目が挙げられる。しかし大学生生活は学業に留まらず、学生の成長に影響を及ぼす要因も多様である。そこで、高校時代の学修・生活行動に始まり、在学中の学修・生活行動、学修成果、学業以外の学内活動、インターンシップや留学等の学外活動など学生の諸活動、さらに卒業後の卒業生・就職先の評価、グローバル人材養成などの産業界ニーズを加え、多角的・継続的に情報収集し、総合的に分析するIRを本学独自用語として《学生IR》と呼び、体制を構築してきた。つまり学生IRは、教育改善に資するデータ提供を主目的に、教学IRのうち教育に関するIRを学生にフォーカスして拡大したものである。

2.2. 学生プロフィールの構成

本学では、「YNU (Yokohama National University) 学生ポートフォリオ」に、学生が学修・生活行動や学修成果をWeb上で記録するシート《学生プロフィール》を組み込み、2018年より本格導入した。全学部生は毎学期の履修登録の際、学生プロフィールを入力してから、履修登録画面に進む。これにより学生は、学修成果を学士力と就業力の両面で可視化し、前学期の活動を振り返ることができる。教職員側は、学生IR情報を全数調査で把握し、成績等の教学IRデータと共に分析することで教育改善に活用できる。つまり、学生プロフィールは学修成果を可視化するツールであり、学生IRのデータ集積ツールでもある。

学修成果を可視化する主目的は、学生の能力の測定、評価にはない。むしろ、学生自身が自分の強み/弱みを自覚し、学生生活を通じた気づきや課題を言語化することにより、主体的な学びの姿勢を醸成することにある。

表1の①⑥の学修・生活行動自己チェックは、日常の平均的な生活時間や学修・生活の意識や態度、将来進路に関する意識等を入力する。生活パターンや学修態度をアンケート形式で「自己チェック」することで、学生に学業や日常生活の課題について気づきを促す。

表1 学生プロフィールの入力項目

春学期 (新入生)	① 高校時代の学修・生活行動自己チェック ② 振り返りシート
春学期 (上級生)	③ 学士力自己チェック ④ 前年度の留学等の授業外活動記録 ⑤ 振り返りシート
秋学期 (全学生)	⑥ 学修・生活行動自己チェック ⑦ 就業力自己チェック ⑧ 振り返りシート

③の学士力自己チェックでは、本学のディプロマ・ポリシーで掲げる学修成果の目標《4つの実践的「知」》の各項目について、前年度を0としてプラス評価で伸長度合いを確認する。学生により元々持っている能力も学修の到達度も異なる。ここでは他者との比較ではなく、自分がどのくらい成長したかを、絶対評価で入力させる。それにより、学生の自己効力感を醸成する意図もある。

⑦就業力自己チェックは、社会人基礎力のカテゴリーで、就業力の現状を確認する。③学士力が絶対評価であるのに対し、⑦は選択肢に他者との比較による相対評価の要素を加味し、より客観的に自己認識できるよう設計した。これら学士力と就業力という異なるチェック項目で、さらに自己評価ながら絶対評価と相対評価により複眼で学修成果の可視化を図り、学生に多角的な視点から気づきを与えることが特徴である。

学修成果は学業、部・サークル活動等の学内活動には限らない。留学、インターンシップをはじめ、学外活動からの成果や学びは④に記録する。

学生プロフィール入力の流れを図2に示す。学生が自己チェックした③と⑦はグラフ表示される。それらを確認しつつ、学生プロフィールの最後で、⑤⑧の振り返りシートに前学期の活動について自由記述でまとめる。記述項目は、就職活動の際、エントリーシートに記入が求められたり、面接の際に問われる主要項目である、学業で頑張ったこと、学業以外で頑張ったこと、自分について考えたこと、将来について考えたこと、の4つにした。毎学期、これら4項目を言語化し、蓄積することで、主体的な学びを構想すると共に、就職活動においても自己PR等の材料として活用できる。この点を、学生が学生プロフィールを入力する動機付けにする意図もある。

これら一連の入力を完了すると、履修登録画面に進み、学生は新学期の履修科目を登録できる。学生プロフィール

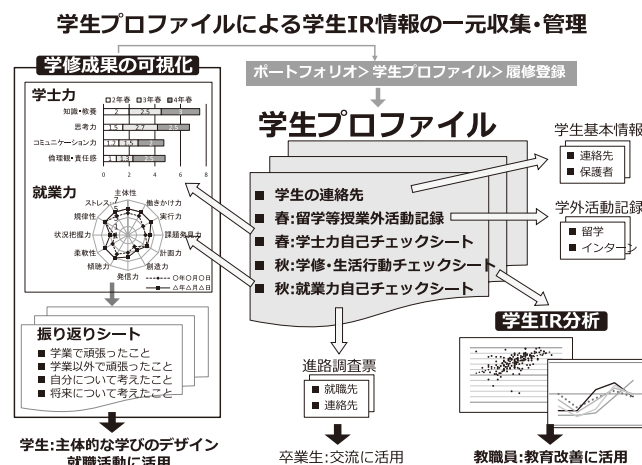


図2 学生プロフィール

に入力されたデータは学生 IR 情報として統計的に処理し、継続的に分析することで、学生の意識や学業上の課題を可視化し、教育改善に結びつけることが可能になる。

3. 学生 IR からわかったこと

学生 IR、または学修成果の可視化の効果は、学生自身の YNU 学生ポートフォリオの活用による主体的な学びの促進度と、学生 IR としてのデータ分析・活用による教育改善実績の 2 つの視点で考えられる。しかし、本格導入から 1 年余りの現在、それらの効果を測定するには時期尚早であろう。一方、半期ごとに全数調査で学生の動向を把握する仕組みを実現したことにより、学部や専攻、入試区分ごとの特徴、学年進行に伴う変化など、これまで教員個々人の感覚的、経験的な認知に頼っていた情報を可視化できるようになった。それに伴い、所属組織や教員・職員の枠を超えて、教育課題について議論する材料を共有できるようになった意義は大きい。そうした成果のいくつかを考察する。

3.1. 主体的な学びの姿勢の醸成

新入生を対象に、本学に進学した目的が明確にある人とならない人に分けて入学時の意識を集計したところ、「将来向かいたい進路、就きたい職業がある」で目的意識が明確な人は高く、そうでない人は低く、両者の差が目立った。新入生たちは、大学で学ぶ目的と将来の進路をつなげて考えている。さらに上級生のデータを大学生生活の充実度を基準変数に決定木分析すると、第一に「学内でよい友人関係ができていく」、第二に「学業と将来の進路を結びつけて学んでいる」ことが挙げられ、これら 2 項が大学生生活の充実さに寄与していることがわかった（市村, 2018）。

本学では、2017 年より 3 年計画で卒業生調査を実施している。学業と将来の進路とを関連付けることの重要性は、「目的を持てるかどうかでモチベーションが変わる。将来との係わりなどを理解させるのが大切」「学生自らがその重要性に気づかないと学習効果が半減する」など、卒業生のコメントからも裏付けられた。

学生の主体的な学びの姿勢を醸成するには、専攻する学業と社会との関わりや進路との関連を意識させることがカギである。このことを教職員が共通認識とし、それぞれが担当科目や学生指導にいかん反映させるかが、教育課題であり、その改善実績が成果になる。

3.2. 学生の行動タイプ

学生の生活時間から行動タイプをクラスター分析すると、次の 4 群に分かれた（市村, 2018）。

- ・ A 群：学業を頑張る人
- ・ B 群：学業+部活・サークル活動に熱心に取り組む人
- ・ C 群：学業+アルバイトに力を入れる人
- ・ D 群：いずれも不活発な人

これら 4 タイプのうち、D 群の GPA は他のグループより低く、早期のサポートが必要と容易に判断できた。A 群は学業に熱心に取り組む問題がなさそうに見える。しかし、B、C 群と比較すると授業外学修や自主学習時間は大差なく、睡眠や通勤時間も大差ないことから、A 群は部・サークル活動やアルバイトに時間を使わない方が娯楽に回っていると推測され、時間の使いかたに課題がありそうなことかわかった。

これら 4 タイプの学生たちは学年進行に伴い、成績や学士力、就業力がどう推移するか。たとえば D から他に行動タイプが変化した場合、その変化の要因は何か。それぞれのタイプの学生たちはどのような業界、職種に就職する傾向があるか。さらに、卒業後のキャリアや人生に関する満足度に相違はあるか。今後、継続的にデータを突合し分析することで教育改善のヒントを得たり、教育の質保証として学修成果を学内・外に示すことができよう。本学が目指す学生 IR の方向性もそこにある。

4. 学生 IR 推進の課題：学生はどう受け止めたか

学生 IR の仕組みの面では、卒業生・就職先調査等を含め、高大接続から大社接続を一貫して見通す流れができあがり、各種 IR 情報を定期的に全学展開できるようになった。しかしながら、学生の主体的な学びの実現、および IR 分析の信頼度向上のために、さらなる課題も見えてきた。実際に学生たちは、学生プロフィールの入力をどう受け止めたのか。筆者が担当するキャリア教育科目で 2019 年 1 月に実施したアンケートおよびヒアリング調査結果（市村, 2019）から考察する。

4.1. 学生プロフィールの入力を必須にしたこと

学生は毎学期の履修登録の際、学生プロフィールの入力を済ませないと履修登録画面に進めない。このような形で学生に入力を強制することが、主体的な学びに結びつくのか。大学とは「自由に」学問に取り組む場ではないか。一方で、就活の時期になって、ポートフォリオに記録しておけばよかったと後悔する学生がいるのも事実である。学生が大学で学ぶ目的や方向性を考えるきっかけとして、定期的に振り返りを促すのも、学生が主体的な学びの姿勢を獲得する一助になると判断し、導入に踏み切った。

調査の結果、学生たちから拒否反応はなかった。本来なら自主的にすべきことだが、定期的に強制されないと忘れるので、半年に 1 回くらい入力を促されるのは気にならない

との受け止めだった。中等教育の延長から抜けきれない意識のため抵抗感がないのか、主体性を獲得するきっかけとしてこうした強制も有効なのか。結論は学生の主体的な学びの促進度の測定を待たねばならない。

4.2. 入力内容の信頼度

学生プロフィールの入力精度を確認した結果、「誠実に入力した」学生は30.5%、「一部いい加減に入力した」が35.4%、「かなりいい加減に入力した」が24.4%、「覚えていない」が9.8%だった。ヒアリングで詳細を訊ねると、学生プロフィールの意義や学生にとってのメリットがわからず、多くの設問に回答するのが途中で面倒になるのが、入力がいい加減になる主な理由だった。

本学では初年次教育用副読本として「YNUリテラシーアカデミック・リテラシー編」を新入生に配布し、その中でポートフォリオの活用法を説明している。その冊子を改めて読み返すと、入力結果を前年度との比較で確認したり、就活に活用できたり、役立つツールであることがわかるという。

ポートフォリオの活用法については、入学時のオリエンテーション等で周知を図っているが、行き届いていない。入力内容の精度が保証されなければ、学修成果の可視化および学生IRの目的は達成できない。学生プロフィールの意義や活用法をさらに周知徹底し、正確な入力を促すことが、今後の取り組みの最優先課題である。

4.3. 学生プロフィールの役立ち度

2018年度秋学期の実施分について、4件法で役立ち度を訊いたところ、表1の⑥学修・生活行動チェックの平均は2.74(中間点は2.5)だった。週当たりの生活時間を入力したことで、時間を無駄に使っていることを認識でき、生活リズムを見直すきっかけになっている。ただし、設問が約70問と多く、途中から誠実に回答しなかった学生も多いと推測される。

⑦就業力自己チェックは3.07。過去の測定結果を含めグラフで視覚的に確認でき、就活の時期に見返したときに参考になりそう、と学生は好意的に受け止めた。

⑧振り返りシートは2.95だった。「学期中に考えたことは記録しておかないと忘れてしまう」「前学期の反省をふまえ、新学期どのように過ごすかという指針になりうる」と意義を理解する学生がいる。一方、「早く履修登録したい気持ちが先立ち一言ずつしか書いていない」など形式的にしか記述していない学生もいる。

なお、これらの役立ち度スコアは、ポートフォリオの活用法を理解していることが前提の値である。学生プロフィール

の入力の最後にも、役立ち度を問う設問を入れたが、全数調査のスコアは2.30に留まった。履修登録時の余裕のない状況で、意義や活用法を知らないまま入力した「やらされ感」のため、よりネガティブな回答に傾いたと推測できる。言い換えると、意義や活用法の理解が進めば、役立ち度はキャリア科目履修生のスコアである3.0前後まで向上させる余地があると期待できる。

4.4. ポートフォリオの開示の是非

YNU学生ポートフォリオには、⑧振り返りシートを指導教員が閲覧し、必要に応じて学生に返信する機能がある。この機能の積極活用の是非について、学生に訊ねたところ、教員への開示賛成は25.6%、どちらでもよいが31.7%、開示したい部分のみ開示が23.2%、開示反対が19.5%と意見が割れた。教員に読んでもらえると励みになること、助言が期待できることが賛成派の主な理由である。反対派には、開示が前提では内省の記録として正直に書きにくいことに加え、そこまで管理されたくない意識がある。さらに、振り返りシートだけ読んで適切なアドバイスが得られるとは思えない、相談が必要なら直接教員にコンタクトする等の意見もあった。

この閲覧機能については教員側も、悩みや課題のある学生を早期に発見しサポートするきっかけになるとの賛成意見と、よく知らない学生に適切なコメントが書けるかという不安や、対応負担が増えることへの懸念が、各学部教授会での意見聴取で表明された。本学のポートフォリオが学生の主体的な学びを促すツールであることを前提に、学生たちの意見を踏まえ、開示機能の活用方針を確定するのが今年度の運用課題である。

引用文献

- 江原昭博(2018)。「なぜ、今学修成果が、求められるのか?」『カレッジマネジメント Vol. 209』(http://souken.shingakunet.com/college_m/2018_RCM209_05.pdf) (2019年9月12日)
- 市村光之(2018)。「学修成果の可視化① 学生プロフィールによる学修成果の測定が始まる」『AP/FD News Letter 10』, 横浜国立大学, 8-11. (<http://hdl.handle.net/10131/00012792>) (2019年9月12日)
- 市村光之(2019)。「学修成果の可視化② 学生たちは《学生プロフィール》をどう受け止めたか」『AP/FD News Letter 11』, 横浜国立大学, 6-7. (<http://hdl.handle.net/10131/00012793>) (2019年9月12日)